

傳説と和歌

一 和歌及び連歌の起原傳説

傳説と和歌とは、既に神話時代に於て縁因を結ばしめられてゐる。何となれば、他の多くの場合に屢見するやうに、その歴史の長く、傳統の古きを誇り悦ぶ心持と、權威づける必要とから、斯道の始源を出来るだけ往古に溯らせようとの希望が、この日本の獨特の藝術形態の起原に關して、傳説的結象を見ずに止まなかつたからである。而も幸にして、唯一つではあるが——偶然とも云ひ得るし、或は當然存在し得べきものであつたとも考へ得られる。——この詩形の兎も角備つた典型的な適例を、早くも出雲神話中に見出し得る事が、和歌史に長大な頁を祝福してゐる。

此の歌天地の開け始まりける時より出で來にけり。然かあれども、世に傳はる事は、久方の天にしては下照姫に始まり荒金の土にしては、素戔鳴尊よりぞ起りける。千早振る神代には、歌の文字も定まらず、すなほにして、ことの心分き難かりけらし。人の世となりて、素戔鳴尊よりぞ、三十文字餘り一文字は詠みける。

と貫之が古今集に序してゐるのが、即ち和歌の起原を神話時代に求めようとしてゐる

る國民意識を代辯してゐると見て差支へない。詩の始源が神話の發生と同時に約束せしめられるといふ事は、寧ろ自然である。開闢神話に於ける伊弉諾伊弉冉二神の唱和が、既に日本の詩の起原であるとも云へるし、下照姫の詠も、上代歌謠の古いものの一つである事は、確で、これ等が日本歌謠——同時に和歌の起原に關する傳説の重要な資料たる事は、云ふまでもない。而も事實は、これ等の歌と素尊の「八雲立つ」の歌と、何れが最も早く製作せられたかは、暫く措くとして、(神話の内容を離れて、二神の唱和のやうな歌謠形式が、個々それが原形であるにせよ、或は後世、少くとも概に素尊の歌より古いとも斷ぜられず、又あの兎も角も整つた和歌形式を持つ素尊の歌が、或は後世、少くともその作に係るのであるかも知れないし、且あれも純粹の上下兩句から成る三十一字詩形とは云ひにくいものであるが)、表現形式だけから云へば、素尊の詠が三十一字詩形を規定し、その進展を豫告した絶好の範例と目されて來たのは、全く當然と云はねばならぬ。

和歌の起原傳説のみならず、和歌から派生した連歌の起原傳説も同様に、神話時代に準ずべき(廣義には神話時代と云つても過言ではない。)日本武尊と火燒老人との「新治・筑波を過ぎて」の唱和に溯らしめられてゐる。

この二つの起原傳説の内容は、餘りに有名であるから省略することとするが、日本藝術の精粹たる敷島の道の濫觴が、神代に在ると考へられてゐるのは、極めて意味深いことで、斯うした傳説の發生は、決して偶然ではないのである。

二 歌物語 (一)

次に傳説と和歌との交渉を、(一)傳説の側からと(二)和歌の側からと、二方面から眺めてみる事にしよう。傳説の側からは、又(イ)和歌を含む傳説(ロ)和歌から生れた傳説の二項に分けて考へる事が出来る。

先づ(イ)の方から述べる事にする。

和歌を含む傳説は無數である。國文學の展開が、和歌と密接不離の關係にあると同様に、そして又それと關聯して、傳説が常に和歌に依つて彩られ、和歌に依つて生命を與へられてゐる現象は、寧ろ當然過ぎる事でもある。前に述べた「八雲立つ」の和歌起原傳説も、「新治筑波」の連歌起原傳説も、それ々の起原を説明する傳説であると同時に、又、和歌を含み和歌によつて意義あらしめられてゐる傳説なのである。

説話の終りに殆ど蛇足的に添加されたり、一部に機械的に挿入されたりしてゐる場合まで入れれば、際限が無い程であるが、一首或は數首の歌が中心となつて、有機的に一箇の説話を形づくつてゐる傳説すらも頗る多い。所謂歌物語と呼ばれる箇々の説話——詳しく云へば、歌物語と稱せられる文學形態を構成してゐる集團中の各箇の説話及び是に準ぜられる獨立の説話——は大抵それである。素より歌物語の

各説話が悉く傳説であるとは云へない。事實談もあり假作の物語もある。けれども口碑傳説とそれ等の事實談或は假作物語との限界は模糊としてをり、又大部分は多少とも傳説的色彩を帯びてゐるのが歌物語の特質でもあり、且歌物語として出色のものは、必ず傳説的興趣の豊かなもののみであるからである。

文學としての歌物語と云へば、誰れも知る通り、先づ伊勢物語次に大和物語を挙げねばならない。伊勢物語は、昔男の名によつて代表せられる綜合的戀愛詩人群——その中で中心をなす最も主要な人物は無論在原業平である。——の和歌生活といふ點で全篇が統一されてゐるが、箇々の説話は各、獨立的に遊離し得る。渚の院の櫻狩(八十二段)や小野の御室(八十三段)等のやうな事實談に近く、傳説的興味稀薄なもの數條を除き、明らかに業平に關係した話でも、例へば女を盗み出して芥川を負ひ渡り、雷鳴の夜中あばら屋の奥に隠して守つてゐたのを鬼に食はれ、

白玉か何ぞと人の間ひし時露と答へて消なましものを

と悲歎したといふ鬼一口の話(六段)や、是も有名な東下り(九段)の條などは、頗る傳説的な想像に包まれてゐる。業平と明記せられてないものでは、筒井筒——隣同志の童男童女が、井筒に丈を比べての睦み遊びに芽んだ可愛い戀物語(一葉女史の小説「たけくらべ」の題名は此に由来してゐる。)

—そしてそれが生長して實を結んだ後日物語の

風吹けば沖つ白波たつた山夜半にや君がひとり越ゆらん

の一首が、夫の心を取り戻した逸話(二十三段)が、傳説的歌物語としては最も目立つてゐる。猶この男主人公も後世では全く業平にせられてしまひ、女は紀有常の娘と傳説化した。謠曲井筒でも、近松の精河内通でもさうなつてゐる。

三 歌物語 (一)

同じ歌物語でも大和物語は性質を異にし、是は各箇の獨立した説話の集録と見るが、妥當で、説話文學的形態を保持するものと云へる。是にも事實談或は少くともそれらしいものは寧ろ多い位であるが、傳説的の説話も少くない。上卷では色好みの平中(平貞文)の話や、檜垣の姫の話はその代表である。下卷にあつては一層この種のを多く含み、就中處女塚の妻争傳説、難波の蘆刈男の傳説、猿澤の池采女入水傳説を初め、安積山傳説、娘捨傳説(この二つに就いては後に述べる)等著名な説話が物語られてゐる。前記筒井筒の話も亦、後段、風吹けばの部分だけではあるが、少し變つた形で載つてゐる。伊勢・大和の他、この系統のものには平中物語、今物語、唐物語等がある。平中物語には、大和物語所収と同一の話も載つてゐるが、作品の形態としては、大和式ではなく伊

勢式である。今物語と唐物語は大和式で、前者では物かはの藏人伏柴の加賀等の秀歌説話や、特に連歌に關する逸話が多いが、傳説的色調の濃いものでは、或人の夢に紫式部の靈が現れて、源氏物語を書いて、妄話戒を犯した罪で、地獄に墮ちた苦しみを免れる爲に供養を頼み

桐壺に迷はん闇もはるばかりなもあみだ佛と常に云はなん

と詠じた話(聖覺法印の表白として知られる源氏供養傳説の原形であらう。寶物集にももつと單純な形の説話が見える。)や、歌は見えないが、女歌人小式部内侍と關白教通との情話に關連した、三輪山型傳説の變形と見るべき、櫻の精との怪婚傳説的奇夢の話等が面白い。後者は二十七種の支那説話を一つく、和歌中心の物語風に日本式に綴り成したもので、琵琶行、長恨歌、西王母、王昭君等著名な話を含んでゐるが、これは猶後に述べてみたい。

四 萬葉及び風土記の和歌傳説

歌物語以前にも、和歌中心或は和歌を含む有名な傳説は随分ある。その集團をば吾々は萬葉集(卷一六)の有由縁並雜歌に於て見出すのである。即ち二人の壯子が一娘子を争つて、終に死に至らしめたので、兩人各、

春さらば挿頭にせむと我が思ひし櫻の花は散りいにしかも

妹が名に懸けたる櫻花咲かば常にや戀ひむいや毎年（こしのは）に
と詠じて哀慟したといふ櫻兒の傳説、同じく三男が一女を争つた鬘兒の傳説（是等は皆
處女塚型の妻争傳説である）或は竹取の翁と九仙女の唱和等は中でも最も知られてゐる。萬
葉の他の卷々でも卷三の、

散零り吉志美が獄を險しみと草取りかなわ妹が手を取る

といふ柘枝（つげのえ）仙女傳説の歌（吉野の人味稻が柘枝仙女に與へた歌だといふ。一説には誤つて挿入された歌とも云ひ、肥前
風土記には杵島曲といふ民謡として出してゐる）卷五の琴の精靈の娘子との夢中の唱和（大伴旅人から藤原房
前へ贈る梧桐の日本琴に附して、山上憶良が旅人に代つて詠じた作）同卷の憶良が松浦河に遊んで、仙女と空
想して海士の子等と贈答した歌等は傳説乃至傳説的の事實に伴ふ吟詠である。
丹後風土記には、浦島の子と龜比賣との歌三首も見えるが、同風土記の羽衣傳説の
歌、即ち天女が羽衣を奪はれて昇天の術を失ひ、

天の原振りさけ見れば霞立ち家路までひて行方知らずも

と悲歎した詠は、同じ三保の羽衣傳説を題材とした謠曲羽衣にも引かれて有名であ
る。常陸風土記には、白鳥の郷の白鳥の天女の歌や、童子女の松原の傳説として知ら
れてゐる奈美松古津松の二樹に化した童男女の歌垣の歌がある。又肥前風土記に

は、領巾振山傳説の異傳たる、大伴狭手彦の妻弟日姫子に關する三輪山型怪婚傳説が
見え、夫に化けて姫子に通うた蛇の詠んだ珍しい歌もある。

五 神佛の詠歌傳説及び高僧傳説と美人傳説

歌物語が生れ行はれてからは、箇々の説話は一層夥しく發生した。殊に俊祕抄・悅
目抄・袋草紙・袖中抄・無名抄・井蛙抄等の歌學歌論書や、今昔・宇治拾遺・十訓抄・著聞集・古事
談等の説話文學に集められ、平家盛衰記・太平記等の軍記物に挿話的に含まれ、謠曲・御
伽草子の題材に採取せられ、更に下つては個人の隨筆類に記録せられて、質に於ても
量と共に甚だ増大してゐる。今その中から著名な話を拾つてみよう。

先づ神佛の詠歌傳説である。

夜や寒き衣や薄きかたそぎのゆき合ひの間より霜や置くらん

これは社の荒廢を帝の御夢に訴へられた住吉明神の歌、

住吉のきしもせざらんものゆゑにねたくや人にまつと云はれん

これも同明神の歌、

戀しくば訪らひ來ませ千早振る三輪の山本杉立てる門

これは三輪の明神で、住吉の神に贈られたとも傳へ、又同神に捨てられた時の歌とも

傳へる。

猶たのめしめぢが原のさしも草われ世の中に在らん限りは
何か思ふ何かは歎く世の中は唯朝顔の花の上の露

この二首は清水観音の歌といふ傳へである。

な、わた七曲に曲れる玉の緒をぬきてありとほしとも知らずやあるらん

これは枕草子に見える蟻通明神の詠で、印度の棄老國傳説の轉化した蟻通傳説(蟻捨傳説の一異形)の事を歌つてある。

本來詩歌に秀でてゐた人だけに、北野天神の神詠と傳へるものが生じても、格別不思議は無い。併しその神詠なるものが、大抵存生中の菅公の詠とは、似ても似つかぬ拙劣なもののみであるのが却つて不思議である。大鏡に載せてある

作るとも又も焼けなん菅原やむねのいたまのあかぬ限りは

の歌などは、内裏が屢焼けるので修理中、鉋をかけてゐいた裏板に蟲喰ひのあるのを翌日發見してよく見ると、それは右の文字であつたといふので、冤罪の憤懣の迸りではあらうが歌としても笑止の限りである。和歌の神人鷹にもかうした話の生ずるのは當然過ぎる事であるが、これも同様人鷹らしくない歌のみである。

山里はいこそ寝られねよすがら松吹く風に驚かされて

と詠んだ西行を

山里はいこそ寝らるれぬればこそ松吹く風も驚かすらめ

と應じて驚かした宿の主の老翁が、人鷹の靈であつたと三國傳記に出てゐるのなど、改字の秀歌の即興だけ、又、人鷹神社の歌會に、賤翁が現れて、

ほのくくと明石の浦の朝霧にと詠みし翁はこの昔の下

と一首ものしたなどは落語の下げに近い。

それから初めの住吉の歌でも靈夢であるが、かうした歌は、多くは祈願の筋があつての參籠中、示現或は夢想を蒙るといふ託宣説話の形式を取る場合が多い。和泉式部が夫の藤原保昌に忘れられた時、貴船の社に參拜して

物思へば澤の螢も我が身よりあくがれ出づる魂かとぞ見る

と詠ずると、社の内から男の聲で

奥山にたぎりて落つる瀧つ瀬の玉散るばかり物な思ひこそ

と明神の御返しがあつたといふのなどは代表的なものである。新古今集釋教の智縁上人が伯耆の大山で曉の夢に授かつた歌、著聞集神祇の上總守時重が任官の御禮

に、日吉の社に千部の法華經讀誦を始めた夜の夢に、貴僧が現れて詠じた歌、那智の千日行者覺讚が、阿闍梨になれない不満を若王子に歎いて、夢中に賜つた慰めの歌等、何れも同種のものである。

高僧傳説や美人傳説に關聯してゐるものでは、西行能因、それから小町が主なものであらう。西行が江口の遊女との連歌、後に述べる能因の雨乞、小町が黒主の奸策を破つた草子洗（これは假作説話が傳説化したといふが適切であらう）勅諭に答へた鸚鵡返し（この二つは謠曲によつても知られてゐる）「秋風の吹くにつけてもあなめく」と、鬮體が口ずさんだ怪談は、中でも人口に膾炙してゐる。西行や能因は寧ろ専門歌人で、嚴密には高德の僧といふは當らないであらうが、純粹の高僧傳的物語としても、行基菩薩が東大寺開眼の時、海に泛んで異國から來た婆羅門僧正を迎へて、

靈山の釋迦の御前に契りてし眞如くちせずあひ見つるかな

と詠んだのに對して、僧正が

迦毗羅會かひらゑに共に契りし甲斐ありて文珠の御顔あひ見つるかな

と歡喜した話などもある。又「何れあやめと引きぞわづらふ」と詠んで、官女萬蒲前を賜つたのは、普通源三位頼政の逸話として盛衰記などにも載つてゐるが、沙石集に、頼

朝が京からあやめといふ美人を召し下したのを、梶原三郎兵衛尉が所望して

眞鷹草あさかの沼に茂り合ひて何れあやめと引きぞわづらふ

と詠んで、同じ裝束した十人の女房中から擇び當てたと見えるのが原話であらう。

六 武勇傳説と怪異譚

武勇傳説に關するものでは、右の頼政が鶴退治の恩賞に、御劔を拜受した時に、郭公名をも雲居に上ぐるかなと後徳大寺左大臣實定（十訓抄に據る。平家には宇治左大臣頼長、盛衰記には關白太政大臣基實）が詠みかけると、とりあへず「弓張月のいるにまかせて」と連ねた話が殊に名高い。平家物語には、再度化鳥を射た時にも、大炊御門右大臣公能の「五月關名をあらはせる今宵かな」の句に、「たそがれ時も過ぎぬと思ふに」と附けたと語つてゐる。同一傳説の異傳かと思はれる。

梶原源太が簾の梅の風流は、盛衰記では、

吹く風を何いとひけん梅の花散りくる時ぞ香は勝りける

の古歌の心としてあるが、但しこれは源太ではなくて、父景時の事らしく書いてある。長門本平家には、平家方から三位中將重衡の使が近づいて、「こちなくも見ゆるものかな櫻狩」と云ひも終らぬに、景季「生捕とらん爲と思へば」と答へた戦場の即興の連歌を

で載せてある。

肥前風土記の怪婚傳説は既に説いたが、この類の代表は何と云つても葛の葉傳説である。

戀しくば訪ね来て見よ和泉なる信田の森のうらみ葛の葉

は、安倍童子が母信田狐が子別れの歌と云はれるものであるが、傳説としての本據は、靈異記や水鏡に見える人獸結婚の説話、そして右の歌の本歌は、赤染衛門が和泉式部を諫めた

うつろはでしばし信田の森を見よかへりもぞする葛の裏風

これに答へた式部の

秋風は凄く吹けども葛の葉のうらみ顔には見えじとぞ思ふ

といふ贈答、それに前に引いた「戀しくば訪らひ來ませ」の歌等である。

七 秀歌説話と歌人の綽名

稍事實らしさを多分に有つ話としては、大鏡にも見える鶯宿梅、

勅なればいと畏し鶯の宿はと問はば如何答へん

大鏡十訓抄著聞集にも見える公任卿三船の譽、

朝まだき嵐の山の寒ければ紅葉の錦着ぬ人ぞなき
(大鏡には上句、小倉山嵐の風の寒ければ)

丹後への使は歸つたかと擲揄した中納言定頼を赤面させた小式部の歌才、

大江山いく野の道の遠ければまだふみもみず天の橋立

父の任地越後へ下る途、重忠に臥して、最後の一字を書き終へずに逝いた惟規(紫式部の兄の辭世、

都にも佗しき人の數多あればなほこの度はいかんとぞ思ふ

その結びの「ふ」の字を父爲時が書き添へた哀話、その他、草鞋くひまでは能因氣がつかずと川柳子に皮肉られた「秋風ぞ吹く白河の關」の能因、落ち行く一門の中から引返し、五條三位俊成の門を叩き、一卷を預けて千載に「昔ながらの山櫻かなの記念を留め、戰場では花や今宵」の一首と共に首を敵に授けた薩摩守忠度等枚擧に違がない。

この類の話では、秀歌によつて綽名を獲たといふのが特に多い。前にも一寸言及したが、待賢門院の女房加賀は、

かねてより思ひしことよ伏柴のこるばかりなる歎きせんとは

の歌から伏柴の加賀、後徳大寺實定の藏人某は

物かはと君が言ひけん鳥の音の今朝しもなか悲しかるらん

の歌から物かかはの藏人、これに關連して、高倉院の女房阿波局は、待宵に更けゆく鐘の聲聞けば歸るあしたの鳥はものかはの歌から待宵の小侍従と、それ／＼綽名を得た。

聞く度に珍しければ郭公いつも初音の心地こそすれ

の初音の僧正（興福寺花林院の永繁）

我が袖は潮干に見えぬ沖の石の人こそ知らね乾く間もなし

の沖石の讃岐（二條院の女房。源頼政の孫）

手枕の野邊の草葉の霜枯れに身はならはしの風の寒けさ

の手枕の兼好（徒然草の作者）

心あてに見し夕顔の花散りて尋ねぞまよふ黄昏の宿

の黄昏の少將（白河樂翁）等皆さうである。何れも純粹の傳説とは云ひ難いであらうが、歌物語としての口碑といふ點と、傳説的誇張に依る流布といふ點では圏外に立つ事は出来ない。

八 歌德傳説

（イ）に屬するもので特に重要なのは、歌德傳説の一群である。藝術傳説の一種で、一

面和歌の功利性を説明してゐる傳説とも見られる得るが、根本にはもつと純粹な氣持が存し、藝術の絶對神秘の力を信じ、これを神聖化する思想と、言靈信仰との結合の具現と見るべきもので、日本人の藝術觀、特に和歌觀の上に於て注目を逸する事の出來ぬ大切な資料である。更に具體的に云へば、古今序の、

力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をも哀れと思はせ男女の中をも和らげ、猛き武士の心をも慰むるは歌也。

といふ信念に、一々具體的な例證を與へようとする希望と信仰とから發生せしめられた歌物語の數々がそれである。

即ち力をも入れずして天地を動かした話の代表は、雨乞傳説である。

ことわりや日の本ならば照りもせめざりとはまたあめが下とは

の雨乞小町（右の歌は後人の作で、小町集に見える原歌は「天にます神も見まさは立騒ぎあまの河の樋口明け給へじ、

天の河苗代水にせきくだせ天降ります神ならば神

の能因法師はその雙壁で、夕立や田をみめぐりの神ならばの其角宗匠は、この流れを汲むものである。弘法の法力、靜の舞踊でも雨は降るが、三十一字若しくは十七字でも同等の効果を擧げ、或はもつと簡易な雨乞法として優越を主張してゐる。雨乞が

出来れば日乞も出来る筈で、簸の梅の源太が、

昨日こそ淺間は降らぬ今日は又みはらし給へ夕立の神

の一首で三原の雨を降らした話が曾我物語(卷五)に出てゐる。

これは天地の感應であり、又「目に見えぬ鬼神をも哀れと思はせた神明感應の話は、漢詩では羅生門の鬼や、竹生島の辨財天を感動させた都良香が有名であるが、和歌の方の代表は貫之と小式部内侍であらう。貫之のは、蟻通明神の前で馬が俄に病み臥したので

かき曇りあやめも分かれぬ大空にありとほしをば思ふべしやは

と詠んで奉つた爲に、馬が癒えたといふ話で、貫之集にも見え、謡曲蟻通にも作られてゐる。内侍のは、大患に際して息の下から

如何にせんいくべき方も思ほえず親に先立つ道を知らねば

と詠むと、天井の鬼が「あな哀れ」とうめいて急に熱がさめ病が癒えた話で、沙石集や十訓抄、著聞集等に見える。著聞集には又、夢に現れた鬼神が、妙音で家隆の名歌を吟じた威徳によつて、松殿僧正行意の赤痢病が癒つた話も出てゐる。この類の話の中では、天智天皇の御代に、討手の大將紀友雄が

草も木も我が大君の國なればいづくか鬼の棲處なるべき

の一首で、叛賊千方に使はれてゐた鬼神を歸伏離散させた傳説も名高い。小式部の母和泉が、貴船で明神の歌を拜承した事は既に引いたが、これも和泉の歌に神明が感應せられたのである。小式部の孝心に對照した親の慈愛は、大江舉周重病の時、母の赤染が、

代らんと祈る命は惜しからでさても別れんことぞ悲しき

の一首を住吉に奉つて納受あり、快癒の喜びを見た話である。

男女の仲を和らげたのでは、前記貴船に祈つた和泉の話もその一例、又「沖つ白波」の歌物語もさうである。赤染衛門にも

我が宿は松にしるしもなかりけり杉むらならば尋ね來なまし

の歌で、夫大江匡衡の愛を引戻した話がある。

戀愛の媒に和歌が用ゐられるのは、實生活に於て既にさうである以上、さうした傳説が無數なのは敢へて不思議でない。殊に中古近古の戀愛譚には、必ず和歌を伴ふのが常である。志賀寺の上人が、京極御息所の御手ばかりを賜はつて、

初春の初音の今日の玉帯手に取るからにゆらく玉の緒

と吟じて（これは實は萬葉集に見える大伴家持の歌である。）戀心を遂げたなどはその尤なるもので、御伽草子の物臭太郎や猿源氏など、一に歌徳によつての立身であり戀愛成功者であつた。殊に傳説界では和歌といふものを通して、業平・小町の二歌仙が完全に一對として結びつけられた。

荒くれ武士の心を慰めたのでは「年を経し糸の亂れと呼びかけた敗將貞任、承久の變に鎌倉方に捕へられ、

勅なれば身をば捨ててき武士の八十うぢ河の瀬には立たねど

と詠じて首の座を赦された鏡月坊、これに似た話の高時に捕へられて

思ひきや我が敷島の道ならでうき世の事を問はるべしとは

と詠んで拷問を免れた頭中將爲明がある。歌廼大意には、彦根の尼慈門が盗人に縛められながら

よし垣ももとは難波のあしなれば越すもことわり夜の白浪

と詠むを聞いて、白浪共も動かされて盗品を還して去つた話も出てゐる。これも同じ類の歌徳説話と云ふべきである。

その他歌徳説話としては、木隠れてのみ月を見るかなと不遇を訴へて昇殿し、更に

「しひを拾ひて世を渡るかな」と歎じて三位になつた頼政や、浅き瀬にこそ仇浪は立て、或は「遠くなり近く鳴海の濱千鳥」の古歌を戦略に利用した太田道灌等もある。

これ等の大部分は迷信的な氣分に包まれてゐるものではあるが、かうした和歌の威徳を信じ、又實際徳化があつた事は、確に或意味で日本は世界の藝術國であると言つても過言ではないであらう。

なほ、歌徳説話に對して、歌の爲に罪を得たり命を失つたりした話もある。藤原長能が、

心憂き年にもあるかな廿日あまり九日といふに春の暮れぬる

と詠んで、公任大納言に「春は三十日やはある」と難ぜられ、恥ぢて病臥し、終に亡せたのなどは歌禍説話の一例、天徳歌合に「忍ぶれど色に出でにけり」の平兼盛に敗けた戀すてふ我が名はまだきの壬生忠見が憤死したといふのも同じ類である。

九 和歌から生れた傳説

形成せられた傳説として見れば、(イ)と全く同じく和歌中心の説話で、且(イ)と判然區別し難いものもあるが、(ロ)即ち和歌乃至歌道から發生した傳説を、一括して概観してみたい。

前記の神詠や歌徳説話も、單なる詠歌に上述の如き傳説が、後人によつて加へられて來た場合が多いと思はれる。「戀しくば」の歌の如き、古今集雜に、

我が庵は三輪の山本戀しくば訪らひ來ませ杉立てる門

と出てゐる、讀人不知の歌に過ぎないのが、三輪傳説(古事記の三輪大神神婚傳説)に結び付いて、所謂しるしの杉の神詠と考へられるに至り、俊秘抄には、歌も前掲のやうになつて載せられてゐる。

聖徳太子が片岡山で、飢臥の乞食を見て

しな照る 片岡山 飯に飢て こやせる その旅人あはれ 親なしに なれなりけめや さす竹
の 君はやなき 飯に飢て こやせる その旅人あはれ

と詠み給うたことは、日本書紀(推古紀)に見えてゐるが、後世ではこの歌が

しな照るや片岡山の飯に飢えて臥せる旅人哀れ親なし

と傳はり、而もその乞食は文珠菩薩(或は達磨とも)の化身で、

斑鳩や富の緒河の絶えばこそ我が大君の御名は忘れぬ

と返歌したとの傳説を生んだ。

安積山影さへ見ゆる山の井の淺き心は我が思はなくに

の歌は、葛城王の怒りを解く爲に、采女が戯れに詠んだとして萬葉集(卷一六)に出てゐるのが、大和物語では、下句が「淺くは人を思ふものかは」となつて、大納言の女が内舍人に盗み出され陸奥の安積山に庵居してゐる中、男の留守に山の井に寫した己が影を恥ぢて死んだ時、木に書き付けた歌となり、全然別箇の傳説を形成してゐる。「風吹けば」の歌(古今六帖には、かぐ山のはなの子といふ者の作として出てゐる)も、萬葉(卷一)長田王、

わたの底沖つ白浪立田山いつか越えなむ妹があたり見む

の歌(或は云ふ古歌)から轉化し、同時にかの傳説を作り出したものである。

姨捨傳説も、古今集(卷一七雜上)讀人不知の、

我が心慰めかねつ更科や姨捨山に照る月を見て

の歌から胎生し、これに支那の原谷の孝子傳説の日本化した棄老説話が合體して成つたもの、安達ヶ原傳説も、拾遺集(卷九雜下)平兼盛の

陸奥の安達が原の黒塚に鬼籠れりといふはまことか

に根元して、鬼神退治の法力説話にまで展開したので、詞書によると、陸奥に名取の郡黒塚と云ふ所に重之が妹數多在りと聞きて云ひ遣しける」とあつて、鬼婆の正體は、美しい娘であつたのらし。

和歌が心なき草木を感動させるといふのは一種の歌徳説話でもある。「東風吹かば匂ひおこせよ」と云はれて春を忘れず、筑紫の配所の主の後を追うた宰府の飛梅、これに關連した一夜松、追ひ松や枯櫻の傳説は戯曲にまで作られ、忠義な三人兄弟と人格化せられた。

深草の野邊の櫻し心あらば今年ばかりは墨染に咲け

と、藤原基經薨去の時、上野岑雄に詠まれて喪色に咲いた墨染櫻、

ことわりや枯れては如何に姫小松千代をば君に譲ると思へば

と小式部に詠みかけられて蘇生した小松（道隆院實際にも類話がある）もある。

又、萬葉の赤人の歌から、和歌の浦に片男浪といふ名所が出来、西行の「心なき身にも哀れ」の歌から、大磯に鴨立つ澤の地名が生じたのなども、和歌から傳説が生れると同じ心理に基づくので、且又一種の地名傳説でもある。

一〇 鶯と蛙の歌

この種のものの中で面白いのは動物の詠歌傳説である。前述のやうな植物が和歌に感じたといふだけではなく、動物が人間並に歌を詠んだといふのである。そして若しさういふ動物がありとすれば、必然にさうでなければならぬ二動物が、古今

序に約束されてある。

花に鳴く鶯、水にすむ蛙の聲を聞けば、生きとし生けるもの、何れか歌を詠まざりける。

自然の聲音すべてこれ詩と説いた歌聖の譬喩が、鶯蛙をして單に自然の音樂家たるに止まらず、現實に歌人としての資格を要求せしめた事實に確證を與へねば止まないのが、又傳説心理である。鶯の歌は謠曲白樂天、蛙の歌は謠曲蛙和國にも見え、共に古今序註にも載せてあるが、曾我物語には「鶯と蛙の歌の事」として特に語られてゐる。

さても花に啼く鶯、水に棲む蛙さへ、歌をば詠むものと云ひけるは、人皇八代の御門孝元天皇の御時、大和國葛城山の麓孝元寺と云ふ所に、一人の僧在りけるが、又も無き弟子を先立てて、深く歎き居たり。次の年の春、彼の寺の軒端の梅の梢に啼く鶯の聲を聞けば、初陽毎朝來、不相還本酒と啼きにける。文字に寫せば歌なり。

初春の朝毎には來たれども逢はでぞ歸る本のすみかに
と鶯の正しく詠みたる歌ぞかし。又蛙の詠みけるとは、昔良貞住吉に行き、忘れ草を植ゑ、歸りて後、又程ふりて後住吉に行き、結びし女を尋ねけるに、かの女には逢はずして、撞れ立ちたりし折節、蛙その前を這うて通りし跡を見ければ、三十一文字の歌あり。

住吉の濱のみるめも忘れねば假初人にまた訪はれけり
これ又蛙の正しく詠みし歌なり。

右の蛙の歌は、古今序註では、

住吉の海人の見る目も恥しやたそがれ人に又や訪はれんとなつてゐる。

和歌に關する傳説で、この兩話は珍奇なもの超特作であらう。なほ太平記(卷二四)には、牛の涎が歌をなした話も出てゐる。

一一 傳説を詠じた和歌(一) 上古

最後に、(二)和歌の側から考へてみる。これは傳説を詠じた和歌といふ事に歸する。これは又廣汎に互るから、主な作に就いて略説する事にする。

傳説はストーリーイを有つ場合が普通であるから、抒情詩よりは敘事詩の題材としての方がより適切である。短歌より長歌に多く作られ、随つて上代、特に萬葉に比較的多く含まれてゐるのは當然である。妻争傳説に關するもので、先づ三山の歌(卷一天智天皇)があり、手兒奈は赤人(卷三)にも蟲麿(卷九)にも詠まれ、葦屋處女は卷九に田邊福麿の歌もあれば、同卷に蟲麿集のものあり、家持(卷一九)にも弔はれてゐる。後の大和物語所載の處女塚の原傳説である。卷五には、憶良の神功皇后鎮懷石の歌が見え、卷九の「詠水江浦島子」一首并短歌は、讀人不知であるが、浦島傳説を詠じた佳作といふ點でも、亦浦島傳説の原形を保持してゐる點でも、興味深い一篇である。末尾の

玉篋たまけ 少し開くに 白雲の 箱より出でて 常世方とこよよに 棚引たなひきぬれば 立ち走り 叫び袖振り
反側こゝろび 足ざりしつゝ たちまちに 情消こころ失せぬ 若かりし 膚も皺みぬ 黒かりし 髪も白け
ぬ ゆなゆなは 氣さへ絶えて 後つひに 壽死いづちにける 水江の浦島子が 家地見いへみゆ

の一節を誦すれば、放生した龜の報恩と玉手箱を開いて白髪に化しただけの結末とに聞き馴れた者は、全然別箇の世界の展開するのに驚かされるであらう。

以上は長歌で、無論反歌を含んでゐる。短歌だけのでは、松浦佐用姫領巾振山傳説を詠じたのが特に多く、憶良の

遠つ人松浦佐用比賣夫戀ひに領巾振りしより負へる山の名

それに後人の追和した一首、最後人の一首、最々後人の二首、三島王の一首、何れも卷五にある。同卷に別に又、同じく憶良が同傳説を詠じた歌、及び神功皇后御立石の古跡を詠じた歌もある。卷三

この夕柘のさ枝の流れ來ば梁は打たずて取らましもを
古に梁打つ人のなかりせばこゝもあらまし柘の枝はも

は柘枝傳説を、卷一六

心をし無何有の郷に置いてあらば藐姑射の山を見まく近けん

は莊子逍遙遊篇の神仙傳説を詠じ、殊に同卷の

虎に乗り古屋を越えて青淵に蛟龍とり來む劍刀もが

が古屋漏の童話を取り入れてゐるのは珍しい。續日本後紀(卷一九)の仁明天皇四十の御賀に、興福寺から奉つた長歌の中にも、

故事に 云ひ語り來る 澄の江の 淵に釣せし 皇の民 浦島の子が 天女に 釣られ來りて
紫の 雲泛引きて 片時に 將て飛び行きて これぞこの 常世の國と 語らひて 七日經しか
ら 限なく 命有りしは この島にこそありけらし 三吉野に 有りし熊志禰 天女に 來り
通ひて その後は 蒙め譴りて 毗禮衣 着て飛びにきといふ

の一節があつて、浦島傳説と柘枝傳説が詠まれてゐる。丹後風土記にも浦島傳説を詠じた後人の短歌二首を載せてゐる。

一一一 傳説を詠じた和歌(二) 中古・近古

宇多法皇が伊勢や貫之に長恨歌の屏風の贊をおさせになつた事は、源氏物語桐壺卷に見えて名高い。その時の伊勢の歌は、伊勢集に載つてゐる。處女塚の傳説をば繪に畫いたものに、やはり伊勢御息所女一宮などが、畫中の各人物に代つての詠歌は、大和物語に出てゐる。唐物語は既に述べたやうに、支那傳説を日本的に翻化し、説話、

中の人物に和歌を詠じさせてゐるのが特色で、これ又、或意味では外國傳説を和歌に詠じたものとも云へる。一二例示すれば、

古へにありへし事をつくさずば袖に涙のかゝらましやは
は琵琶行の白樂天、

繪に畫ける姿ばかりの悲しきは問へど答へぬ歎きなりけり

は李夫人を慕ふ漢武帝である。支那傳説で特によく詠ぜられるのは王昭君で、朗詠集にも新撰朗詠集にも特別にこの題がある。唐物語中にも無論見出される。

かぞいろは如何に哀れと思ふらん三年になりぬ足立たずして

これも朗詠集にある。原歌は日本紀竟宴歌集に見えて、上句は「かぞいろは哀れと見ずや蛭の兒は」とある。

岩橋の夜の契りも絶えぬべし明くる佳しき葛城の神

これは役行者に使役されて、石橋をかけた葛城の一言主神の傳説、
三輪の山如何に待ちみん年經とも尋ぬる人もあらじと思へば

これは三輪傳説で、前に引いた赤染の「我が宿は」の歌もさうである。

藪原や伏屋に生ふる帚木のありとは見えて逢はぬ君かな
は信州の帚木の傳説で、坂上是則の作、

芹摘みし昔の人も我がごとや心にものは叶はざりけん

は、俊祕抄や童蒙抄に見える芹摘みし物語（昔賤しい男が戀する貴人の食べる芹を摘み食んで、せめての心やりにした哀話）、唐物語以外でも、

虎と見て石に立つ矢もあるものをなどか思ひのとほらざるべき

斧の柄は朽ちなば誰もすげ代へんうき世の中に歸らずもがな

は、李廣の故事に、斧の柄が朽ちた王質の支那傳説を、それ／＼詠んだのである。

一三 傳説を詠じた和歌（三） 近世

文化の進展するに隨ひ、傳説の幻影は漸次に薄れてゆく。理知的科學的な氣分が濃厚な近代に、この種の文學の續出を見ないのは當然であるが、何れの時代にも、どんな人にも、無邪氣な童心と、自由な空想と、過去に憧れる心とは絶滅しない。江戸時代の中で、童話長篇と、大愚良寛の長歌とは、是非擧げねばならない。

童話長篇は、國學者黒澤翁滿が萬葉の長歌に倣つて作つた、舌切雀桃太郎、勝々山猿、蟹花咲爺乙姫、小便川の七篇で、小便川は最も奇抜滑稽、それから乙姫は猿の生肝の童

話を詠じたものである。次に「詠舌切雀長歌并短歌」を掲げる。

をとめ等が 袖振る山の 瑞垣の 久しき時ゆ 語り繼ぎ 言ひ繼ぎけらく 古に 翁おきなありけらし 翁は山に 柴刈り 狐は川に 古衣 解きて洗ふと 煮し糊を 雀食ひぬれ 梓弓 張るべき衣の すべをなみ しこつ雀 この舌や 糊食ふ舌と 鉄もて 切りて放ちぬ 足引の山より翁 歸り來て 歎き思づき 赤らひく あしたは餌かひ ぬば玉の 夕さり來れば とくらたて 愛ぐし美し わたつみの 挿頭かぶしの玉と 手に据ゑて あり來しものを うれたくも 放ちけるかも 心なく 舌さへ切りぬ 今更に 歸り來めやと 足ずりし 叫びおらび 狐をば 痛く嘔をびて 末終に 行方尋まがんと 玉くしげ 憶れ出でて 我が鳥の 宿りや何處 舌切れる雀や何處 ちゝのみの ちゝよ／＼と 音に鳴きて 在處ありか求めつゝ 山のそき 野のそき行けば いくみ竹 籠れる蔭に たしみ竹 たしにあへして 種々の たなつ物出し 葛籠つとごの 重きと輕き 家づとを いづらと問へば うつせみの 世の遠人の 重からば 歸さにあへじと 葛籠の 輕きを負ひて 玉鈴の 道もやすらに つまごもる 宿に來着きて 開けたれば 玉に黄金こがねに 銀しろがねに 寶の極み うまごりの 綾錦さへ そこらくに あらくを見てぞ 狐も 雀の宿り こまつるぎ 我も訪はんと ふくつけき 心振り起し 舌切れる 雀や何處 ちゝのみの ちゝと呼びつゝ 求め行きて かく老いぬれど 我はもや 重きにあへんと 葛籠の 輕きは取らずで 喘ぐ／＼ 岩根さくみて なづみつゝ 家に歸りて かき數ふ 蓋を取れゝば 這ふ蟲の 禍出でて 百足ひか刺し 蛇あひかき付き 谷ぐくは 眼にゆまり へみさへに うなじにまとひて 狐は 遂に死にけり ねぢけ人の 物の報は いちしばの いちじろきかも すむやけきかも いさゝかの湖といへども庭雀食はずば舌も切られざらまし

良寛和尚詩歌集に、月の兎と題した長歌二篇が收められてある。大唐西域記や雜譬喻經・雜寶藏經等に見える釋迦の本生譚の一つである印度の寓話で、兎が身を焼いて旅人の飢を救うた話を詠じたもの、歌としては翁滿のより遙かに勝れてゐる。

舌切雀を擬古文に綴つた井上淑蔭の「かくれ里」の附録に、小山田與清・清水光房等のそれを題にした歌があり、六六園春足の狂文・猿蟹物語には、六樹園の序や加納諸平の歌、その他名古屋・大阪を初め諸國の狂歌師等の歌が添へてある。狂歌といへば、岩戸神話を詠んだ

日の本は天の岩戸の昔より女ならでは夜の明けぬ國

や、これも舌切雀の童話を詠んだ

雀殿お宿はどこか知らねどもちよつちよと御座れさゝの相手に

など傑作の部であらう。後のは蜀山人自筆の百首狂歌に出てゐる。

昭和十六年九月二十日 印刷
昭和十六年九月二十四日 發行

國文學の新考察
定價金六圓

不許	複製
----	----

著者 島津久基
發行所 東京市牛込區拂方町二十七番地 至文堂
佐藤正叟
印刷者 東京市京橋區銀座西二丁目三番地 高橋郁

發行所 東京市牛込區拂方町二十七番地
振替口座東京二九五〇七番
日本出版文化協會會員番號二二〇七二
電話牛込(34)四四四五番
東京市神田區淡路町二ノ九

配給元 日本出版配給株式會社

三協印刷株式會社印刷

908

113

終